



Title	＜書評＞『日本タイル博物誌』 阿木香, 日野永一, 新見隆, 山本正之 株式会社INAX1991年
Author(s)	足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 137-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『日本タイル博物誌』

阿木香, 日野永一, 新見隆,
山本正之

株式会社 INAX 1991年

『日本タイル博物誌』は昨年の『日本タイル博物誌』に続く INAX による『第三空間選書』の第二弾として企画されたものである。これらに先立つ『美の彷徨——テラコッタ』や最近の『レヒネル・エデン』, さらに「INAX ギャラリー」の企画に合わせて出されるブックレットを併せるとかなりの図書が INAX (かつての伊那製陶) から出版されていることになる。

ブックレットの方はすでに企業の特徴を活かした企画から, より一般的な内容へと移っているが, 単行本の方はまだ企業活動の周辺という感もあり, それが逆に一般の出版社では気付かないユニークな企画を生み出す原因ともなっている。この『日本タイル博物誌』もタイルの歴史と様々の実例を紹介しているのであるが, 会社史のようなところはなく, むしろタイル文化史ともいえるべきものを浮き彫りにしようとしているところは好感がもてる。一般の人には何気ない存在であるタイルが, 写真や論説を通じて身近な存在となり, それがひいては企業イメージの形成にも役立つという方針であろう。

さて, 本題の『日本タイル博物誌』であるが, ここでは「タイル」という対象に少し限定が加えられている。まず, 日本で使われている事例に止めていること, 戦前のものに限っていること, それと最も大きな特色は「日本のタイル」という面に着目し, その源泉を遠くセンや瓦の歴史にまで逆上っていることである。このような限

定は戦後のテクスチャとしてのやや単調なタイルの使い方を考えると頷けるし, 海外の多彩な事例を扱うには紙面が限られているからやむを得ない選択であろう。ギャラリーのブックレットではビクトリアン・タイルなども企画されており, そのうち海外編が出版されるのかもしれない。

内容は最初に54例のカラー写真構成によるタイルの使用例の個別解説があり, ついで3編の論説が掲載されている。日野永一氏の「“日本のタイル”の誕生」, 新見隆氏の「ヴァナキュラーなユートピア——近代日本の住宅とタイル」, 山本正之氏の「施工の変遷から見たタイル史——裏から支えた職人たち」である。日野氏の論文は日本におけるタイルの歴史を遠く逆上り, 日本の古代に中国から伝来する磚や瓦, 江戸の本業敷瓦から明治期の西洋タイルの伝来とその融合・普及まで「日本のタイル」の歴史を概観しようとする力作である。新見氏の論文は本題のタイルとはやや論旨が外れているかのようにみえるが, ほぼ近代日本の住宅史に尽きている。山本氏のそれはタイルの施工に伴う実務的な説明が一般向けになされている。山本氏は全国タイル業界の会長を務めるなど専門のタイル販売業のかたわら, 江戸時代を含む貴重なタイルを蒐集されたコレクターでもある。

全体としてはタイルという多彩な素材を何とか絞り込んで一冊の本のなかに捉えようとする苦心が窺えが, 瓦からタイルへとという「日本のタイル」という視点と, 新た

に捜し出したという事例を含めて54の事例は必ずしも一致しているわけではない。やはり事例としては比較的新しいタイルが主流となっており、なまこ壁や塙と一緒にするとなにか落ち着きが悪く感じられる。それは山本氏の明治以前のまさに「日本のタイル」と言うべき貴重なコレクションの扱いが二次的になっていることにもよる。

実はこのようなテーマと内容のズレが生じた原因は、すでにINAXギャラリーで行われている『日本のタイル』展と同名のブックレット（1983年10月出版）との違いを出そうとした結果と思われる。このブックレットでは「日本」に重点が置かれており、上記の山本コレクションを主体として視点に新鮮味もあり、まとまりを持っている。逆にこの書では企画としての新味を狙うあまり、逆に内容の混乱を招いたとも言えよう。先行のブックレット中の対談において村松貞次郎氏が「装飾タイルだけの系譜をたどれば、江戸から明治へと、かなりスムーズにつづいていると思うのです」という感想とちょうど裏腹な印象を招いているのは、やはり外装タイルやモザイクタイルを含めた、やや盛り沢山な内容のためであろう。

おそらく、タイルという素材は西洋の源泉としては石の代用品というところに行き着くであろうし、この書で扱おうとしている「日本のタイル」の焼き物としての源泉とは少し感覚を異にすると考えられる。外装タイルは化粧煉瓦、煉瓦、石というように遡及されうるのに対し、「日本のタイル」は江戸時代の茶道具に象徴されるように焼き物としての装飾性、絵付けや釉薬の技術に収斂していく。その二つの流れが明治と

いう時代に重なり、西洋化していくわけであるから、「日本のタイル」の歴史に重きをおくなら、あまり外装タイルやナマコ壁などに触れずに装飾タイルに徹したほうが良かったと思われる。

ただ、タイルといえば浴室やキッチンに用いる内装タイルか、外壁に張る外装タイルというように思い込んでいる建築界の一般常識を考えると、前回の『日本のタイル』のように絞り込むには単行本としては一般性に自信が持てなかったのかもしれない。また、風呂屋の富士山のタイル絵とか暖炉まわりの使用に事例が集中するとなると、このようにまぜこぜにして並べるのも一つの編集方針であるのかもしれない。ただし、それならそれで、なぜテラコッタに触れないのかとか、どうみてもタイル張りに見える化粧煉瓦石やタイルと同様な用い方をするテラゾ・タイルなどになぜ触れないのかという疑問が生じてくるのも偽らざる印象である。あるいは、外装タイルやモザイクタイルとなるとその使用法、つまり設計者の比重が重要となるはずであり、そのあたりに配慮を欠いているのも物足りないところである。日野氏のタイルの製作とその歴史があり、山本氏のタイルの施工法が述べられているのだから、できればそれを用いる建築家の側面からの記述が望まれたところである。

やや内容よりも本の構成に話が集中することになったが、こうした図書を理解するにはどうしても独立の編集事務所の果たす役割が無視できない。出版界の事情にはそれほど明るくないが、この書を企画した入澤企画制作事務所のような出版企画・編集会社が急成長していることは確かなようだ。

私が関与したものだけでもこうした編集企画会社が扱う出版物は結構多く、いずれも相当グレードの高い出版物を出しているのが注目される。これらの編集事務所の多くが何らかの形で企業誌の発行に関係しているらしく、安定した基盤のうえで、既存の出版社にはできないユニークな企画を練っているのだという。確かにこの本でもそうした編集事務所の企画した特色がよく現れていると思われる。それは出版そのものの動機がこれまでのように著者からの持ち込みではなく、企業からの委託によって企画をたてることであり、著者はその企画に合わせて最も適当な人選が行われるとこうこと、あるいは従来の出版社が著者に一任していた取材等の仕事を代わって編集事務所が行うこと。思い切った企画が可能であり、従来の出版企画が専門家向きか一般向きに分化していたものの中間が狙えるなどの特徴があると思われる。

この本でも54例にのぼる建物の取材・撮影は編集事務所ないしはフリーの著者が行っており、この種の出版企画の機動性が伺われる。実は、この書で扱われている阪急三宮の壁画などはアールデコのモザイクの好例として私も眼をつけていたものであるが、あまり知られていなかっただけに何処かに情報の提供者がいると思っていたところ、実は全国のめばしい個所に電話をかけまくり、見つけたものだという。こうした作業自体、これまでの受け身の編集者と異なり、やや雑誌編集作業に近いものにも見受けられる。ある意味ではこうした編集事務所はこれから益々活躍するであろうし、書物のあり方にも変化を与えていく存在になるように思われる。ただ難を言えば、自

由度とは逆に一般受けする編集技法に頼りすぎる嫌いがあり、出版の依頼者の方を向きすぎる場合もあるようだ。

最後になったが、本書のなかの幾つかの疑問点を挙げておきたい。一つは事例紹介において煉瓦の表面に釉薬をかけた化粧煉瓦とタイルを厳密に区別していないことである。私の経験でも明治期から大正期のものは、ほとんどタイルと見間違ふようなものでも取り出してみると化粧煉瓦の場合が多く、注意を要する。それと旧二条陣屋の浴槽は後の補修ではないかと思われることである。それはタイルが剥がれた部分はどうみてもモルタルであり、この当時は防水性をもった目地材がなかったはずだからである。

ともあれ、この書は博物誌というタイトルにもあるように、気楽にページを繰っていくのも一つの見方であろう。そこに感じられるのは、日本におけるタイルの使用法が控えめなことである。ときに和風のなかに執拗な追求も見られるが、それでも陶器で部屋全体を覆い尽くすといったヨーロッパのような傾向はない。レヒネル・エデンやガウディのような徹底したモザイクの使用例も無い。それは、丁度日本人建築家が色大理石を使わず御影石を好み、モダニズム以降もモノトーンを好むということと共通する素材感覚があるようにも思われる。

(足立裕司 神戸大学)